

## 南アルプス邑野鳥公園でのオオコノハズクの営巣報告

### はじめに

オオコノハズク *Otus lempiji* は、日本において本州では留鳥として生息しており、環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に分類されている。しかし、その生態の多くは詳しく研究されていない。また、東京井の頭公園では、飼育下での継続繁殖に成功しているが、野生化における繁殖生態にはついてはほとんど分かっていない。そのオオコノハズクの営巣が山梨県早川町南アルプス邑野鳥公園（以下、野鳥公園）において2016年2017年と連続で確認されたので、その生態を知るための貴重なデータとしてここに報告する。

オオコノハズクは、それまでに早川町内における生息は確認されていたが、営巣・繁殖が確認されたのは初めてである。今回営巣を行ったのは野鳥公園で継続的に設置しているムササビ用の巣箱であった。山口県でもムササビとオオコノハズクが、時期をずらして同一巣箱を利用した例が知られているが、野鳥公園においてもそれと同様のことが起こったと言える。

今回の観察記録はすべて巣箱内に設置しているCCDカメラで撮影・記録を行った。

### 繁殖の状況（2016年、2017年）

#### (1) 2016年

2016年は3月30日に空のムササビ巣箱内での日中のねぐら利用が確認された。その際は、産卵・抱卵は確認できず、翌日もねぐら利用が継続確認された。

そして、4月4日に第1卵目の産卵が確認された。その後4月8日に第2卵、4月10日第3卵を確認した。しかし、抱卵中の5月1日に巣箱内に侵入したテンによって卵がすべて捕食され

てしまった。メスは直前でテンの接近に気づき、巣外へ逃げた。

繁殖失敗後の同年中の営巣・ねぐら利用は確認されなかった。

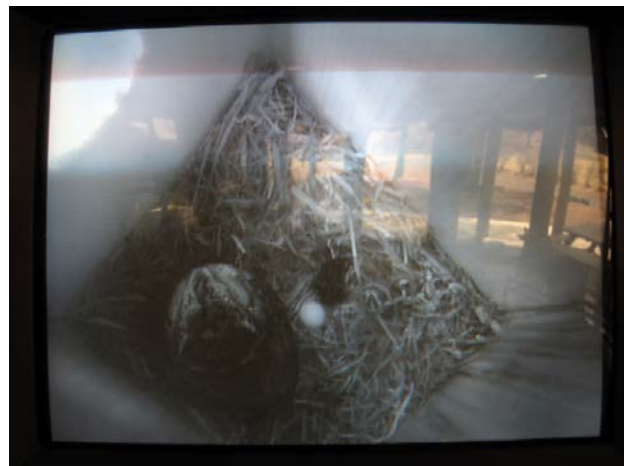


図1. 巣箱内の様子（2016年）

#### (2) 2017年

2017年もムササビ用の巣箱においてオオコノハズクの産卵が確認された。直線距離で20mほど離れた前年とは異なる巣箱であった。前年と同個体かは不明である。

2017年は5月1日に第1卵、5月3日に第2卵、5月6日に第3卵、5月7日に第4卵を確認した。その後、6月1日に雛1羽の孵化を確認した。翌6月2日に第2羽、6月4日に第3羽が孵化した。第4卵の孵化は確認されず、第3羽が孵化して1週間後に卵は消失した。他の鳥類の事例から考えると、食べたか巣外へ破棄したものと思われる。その後、3羽の雛は順調に成長し、6月30日の夜に巣箱近くの林で鳴く雛の声をスタッフが確認した。翌日の巣箱内は空だったため、状況的に考えて巣立ったものと思われる。

抱卵期間は25日、育雛期間は30日であった。



図 2. 巣箱から顔を出すメス成鳥 (2017 年)



図 3. 巣箱内の雛の様子 (2017 年)



図 4. 巣立ち間際の雛 (2017 年)

表 1. オオコノハズクの繁殖状況

オオコノハズク繁殖記録						
年	観察期間	産卵抱卵期		育雛期		備考
		日数	卵数	日数	雛数	
2016年	3/30~5/2	28	3	-	-	5/2にテンにより全ての卵が捕食される
2017年	5/1~7/1	31	4	30	3	6/30夜に巣箱近くの林で雛の鳴き声を確認

(3) 繁殖中の行動について

(a) 産卵抱卵期

期間中、メスは日中も同一巣箱内に留まっていた。抱卵は一斉抱卵であった。オスが巣箱まで獲物を運んできていた。

これらはフクロウ類に多く見られる繁殖行動である。また、一斉抱卵であったが、産卵期と思われる期間中、他の小鳥類と違いメスが巢内に留まり、たびたび抱卵のような行動が見られた。雛の成長にもバラツキがあり順次抱卵の可能性も完全には否定できない。そのため、ステージを分けずに「産卵抱卵期」とした。

巣箱内のカメラの記録では、オスがメスに給仕を行っていたが、期間中にメスの30分程度の出巢も確認している。このため、メスが自ら狩りを行っている可能性もある。ただ、巢外のオスと巢内のメスが鳴き交わした後にメスが出巢するのを直接観察でも確認している。そのため、巢外でオスがメスへ給仕している可能性もある。

(b) 食性

カメラで確認できた獲物で最も多かったのはアカネズミ属 *Apodemus* の一種であった。他、ヤマネや巣箱内に侵入してきた昆虫類やクモ類を捕食するのも確認された。獲物はその場で食べることもあれば、巣箱内に放置し後に食べていることもあった。特に育雛初期は巣箱内に一旦放置した獲物をメスがちぎって雛に与える様子が確認された。

産卵抱卵期のオスの給仕はほぼ毎日行われ、多いときは24時間に3回であった。これほどの頻度でネズミが運ばれてくるのを見て、野鳥公園の森にそれほど多くのネズミが生息していることに対する驚きもあった。

(c) 非給仕行動

育雛後期になるとメスが巣を不在にするようになった。これは、他の鳥類でも見られる巣立

ちを促す非給仕行動だと考えられる。実際、メスが不在になってから雛の羽ばたき行動や飛び上がる行動が増えた。その後、メスが不在になってから8日後に巣立ったと思われる。

## 考察

今回観察されたオオコノハズクの繁殖生態は、山口県や鳥取県など他地域における野生個体の直接観察の事例と近い結果となった。特に繁殖期間はほとんど差異がなかった。しかし、営巣中の巣内の映像記録は他にほぼ例がなく、詳細な食性や繁殖行動などを知ることができる非常に貴重なデータであり、今後さらに分析を進めていきたい。特に今回抱卵について謎が残っている。各雛への給仕回数などを分析することで、一斉抱卵か順次抱卵かの答えを出せるのではと考えている。他、雛の発達段階による行動の変化も解明できると面白いと考えている。

オオコノハズクの営巣及び繁殖は、繁殖中は一般向けの公表は控えた。本来は観察が前提である巣箱の利用であったが、絶滅危惧種であることを踏まえて、観察圧により繁殖放棄する可能性を考慮した結果である。ただ、鳥取県の事例のように人馴れしていくようであれば観察会も実施できればと考えている。

また、繁殖が確認された際に営巣木にテン返しをつけようという案が上がった。巣箱による外敵の誘因性も様々な事例から示唆されているためである。しかし、巣の近くでの作業は営巣放棄の可能性もあったため、孵化が確認されたから設置する方針となった。結果として、2016年はテンに卵が捕食される事態が起きた。2017年は繁殖が確認された早い段階でテン返しを設置した。その後、無事に巣立ちまで迎えることが出来た。

今回のように、生物同士の関係性に人がどこまで介入するかということは、いつも非常に難しい問題である。特に今回は観察することが前

提である巣箱での繁殖だったため尚のことである。つまり、巣箱を設置すること自体がすでに自然に介入している状態であり、そこを利用した生物に対して配慮しながら、介入した責任をどう取るかということである。

こうした自然との付き合い方は、その都度その個体ごとに状況が変わるため明確な正解は存在しない。むしろ正解を決めてはいけなと考えている。自然との共生に向け、自然とより良い関係を築くために、生態系にとっても個体にとっても最善の方法をこれからも考えていきたい。

また、南アルプスユネスコエコパークの登録地である早川町に、貴重な生物が生息し繁殖をしていたという素晴らしい事実を、今後地域へ発信していけたらと考えている。それが地域の住民が地元を愛し、そこにある自然や文化を大事にするきっかけになって欲しいと願っている。

山梨県早川町立  
南アルプス邑野鳥公園  
研究員 松本哲矢